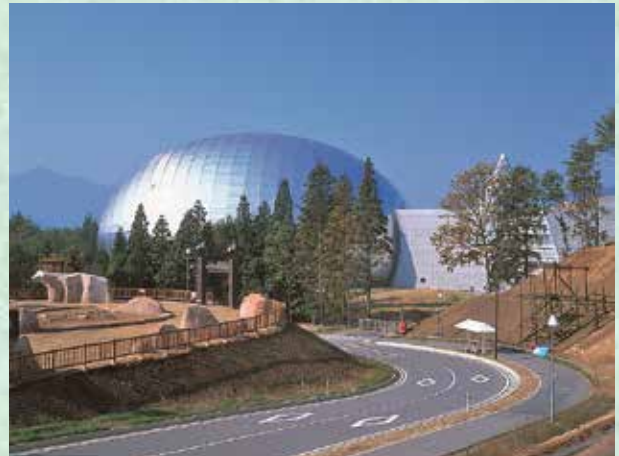


令和5年度

# 福井県小学校長教育研究 奥越大会研究紀要

2023 No. 49



福井県小学校長会

A	B	A 大野城 B 福井県立恐竜博物館 C 六呂師高原 星空 D 平泉寺白山神社
C	D	

**自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る  
日本人の育成を目指す小学校教育の推進**

— 夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び  
未来を生き抜く力を育成する学校経営 —

**研究紀要 No.49 (2023)**

**福井県小学校長会**

# 全体会

## 第75回 福井県小学校長教育研究奥越大会





# 分科会



第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会



第6分科会



第7分科会



第8分科会

---

# 目 次

---

## 挨拶

福井県小学校長会 会長 田中 範 継 …………… 1

## 祝 辞

福井県教育委員会 教育長 豊北 欽 一 …………… 3

勝山市長 水上 実喜夫 …………… 5

## 大会要旨

大会主題・大会趣旨 …………… 7

大会日程 …………… 8

分科会概要 …………… 9

## 分科会主題別研究

第1分科会 提案者 坂井市立東十郷小学校長 岡 崎 良 子 …………… 12

第2分科会 提案者 御陵小学校長 田 邊 尚 紀 …………… 14

第3分科会 提案者 若狭町立瓜生小学校 城 谷 俊 臣  
若狭町立熊川小学校 加 藤 勝 代 …………… 16

第4分科会 提案者 大野市有終東小学校長 竹 内 由 美 …………… 18

第5分科会 提案者 越前市味真野小学校長 松 谷 昭 子 …………… 20

第6分科会 提案者 越前町立糸生小学校長 安 井 秀 明 …………… 22

第7分科会 提案者 敦賀市立栗野南小学校長 竹 中 由 紀 …………… 24

第8分科会 提案者 福井市岡保小学校長 松 宮 龍 栄 …………… 26

福井県小学校長教育研究大会主題・副主題一覧表 …………… 28

## あとがき

福井県小学校長教育研究委員長 勝山市立北郷小学校長 奥 村 純 子 …………… 30

# 挨拶

福井県小学校長会

会長 田中 範 継



## CHATGPT

みなさん、福井県小学校長教育研究奥越大会へようこそ！

まずは、多くの先生方や教育関係者、そして子供たちに感謝の気持ちを込めて、お会いできることを心より喜ばしく思います。

この大会は、私たちが教育の第一線で日々取り組む中で得た知識や経験を共有し、よりよい教育の質を向上させることができると信じています。

この大会を通じて、新しい仲間を作り、有意義な議論と情報交換を行いながら、教育の力を高めていきましょう。

と、これは、CHATGPT で作成してみた会長挨拶文です。「奥越大会会長挨拶」と入力したら、もの5秒でできあがりました。

ここからは、わたくしが自力で考えた内容で、ご挨拶申し上げます。

まずは、本研究大会に、公務御多忙の中、ご参会いただきました福井県教育長 豊北欣一様、勝山市長 水上実喜夫（みずかみ みきお）様、勝山市、大野市の両教育長様に心からお礼申し上げます。

今年75周年を迎えた福井県小学校長会は、その活動方針において、「校長は、志高く学び続け、活力ある学校・信頼に応える学校づくりに努める。」としています。この節目に当たり、先人から受け継いできた学校教育の理念、目的、目標といった「不易」の実現と、予測困難な社会や時代の変化「流行」への対応を、今一度、大切にしていきたいと思えます。

さて、「学び続ける」と申しあげましたが、このことは、校長のみならず、教員全体によく言われることです。一昨年度の話ですが、本校においてコロナ禍により研究活動の縮小をやむを得なかった時期に、研究協議の際にある中堅教員から「どうして研究授業をしなければならぬのですか。」という質問が出されました。全体協議の場でいきなりそれもある程度経験のある中堅の教員から出されたこの言葉に、驚きと焦りのあまり、恥ずかしながら私はまともな回答を返すことができませんでした。それまでに、十分に研究する意味や必要性を指導しきれていなかったことも反省させられました。しばらくの期間考えて、次の協議会の場で私は「日之出小の子供たちに合った教育を考えられるのは私たちだけだからです。私たちが研究してよりより教育活動を展開することが義務なのです。」とようやく話すことができたのを覚えています。このことが心に引っかかっていた私は、昨年度的全連小島根大会の際に、グループ協議の中でこのことを紹介し、他県の校長先生のご指導を仰ぎたいと思えました。その時、東京都の校長先生は、すかさず、「私の学校では、『研究授業は、①授業力を高める ②子供をよくする ③教育課題を改善する ④学校教育目標を達成するために行う』と教えています。」と即答してくださいました。即答です。このとき他の校長から学ぶことがいかに大切か実感しました。このことは、すかさず学校に帰って次の会議で教職員に伝え、県の理事会においても報告しましたので、校長先生の中にもお聞きになった方がいらっしゃるかもしれません。

私たちの住んでいる福井県の小学校教育については、私たち自身が学び研究していかなければなりません。「組織は、リーダーの力量以上には伸びない」。この言葉を胸に、今日は皆様にとって意味ある有意義な協議になることを心より願っています。

また、本研究大会のもう一つの目的は、貴重な情報交換です。これも各分科会でできるだけ時間を作っていただき、一人職である悩み多き校長の心の居場所づくりにご利用ください。せっかくの機会ですので、私の方からも、この全体会の場をお借りして情報提供をさせていただきます。

7月6日に東北の宮城県の小学校において、軽トラックが校地内に侵入しわざと児童をひきケガをさせるという事件がありました。子供の命を守る私たちにとっては大変ショッキングな事件でした。あのような状況では避けきれないと思った方も多いのではないのでしょうか。この事件のことを職員室で先生方と話していると、大変なことが判明しました。それは、今年に埼玉県から派遣され本校に研修に来ている教員がいるのですが、その先生は宮城県出身で、事件のあった学校の校長先生は、その先生のお父様だったのです。お父様は、事件の後ふさぎ込んでいて伺って、私はいてもたってもいられず、夏休みになってから、失礼ながら宮城の学校に電話をしてしまいました。その際の校長先生からの情報提供です。なお、このことを福井県校長会で紹介することは、ご本人の了解を得ています。当日、15時25分頃、「理科クラブ」を駐車場で行っていたところ、校門からゆっくりと軽トラが入ってきて子供に向かってきました。近づいたところでブレーキを踏んでスピードを緩めましたが子供たちにぶつかりました。子供たちはつまずいて転倒し膝をすりむく程度で、中には頭を打って血を出す児童もいたそうです。次に、担当の教員に向かってきたので車を静止させ、はねられた子供の安否確認を最優先したため、運転していた犯人を見失ってしまいました。他の職員がすぐに対応し、本人を放送室に誘導するなどして、最後は教頭が押さえたそうです。この際、新聞等では校長の存在が明らかにされていませんでしたが、実はこの日、校長は「小学校長会東北大会」で山形へ出張中で、警察や保護者への対応は教頭がすべて行ったそうです。また、新聞には保護者への連絡の遅れも指摘されていましたが、警察の方から不確かな情報を発信しないように止められており、教頭は、保護者への情報提供を控え、校長不在で即座に判断もできず、どうしたらよいか大変迷ったそうです。対応について教育委員会からは、警察と話をして動くようにと言われ、警察へ対応について問いただしても、「現場では判断できないので本庁に確認します。」との返事待ちで、動くに動けなかったというのが現状だったようです。そのうちに、18時の全国ニュースが流れ、保護者はそこで初めて知らされることになり、その後、緊急メールが配信されるという始末になったようです。20時から、保護者説明会を開きましたが、訳のわからない校長が一人で対応する形になってしまいました。(市教委は会場にいたが、同席しなかった。)保護者は、学校の連絡が遅いことを責め、警察への不満を露わにし、中には事件に関係のない日頃の学校の管理についても質問や意見が出されたそうです。

私が電話をした時に、校長先生から最初に、幸いなことに児童の命が守れたこと、大きなけがで無かったことについての安どの言葉と、現場で対応した先生方が冷静に犯人に対応したことへの感謝の言葉がありました。また、この市では、事件後すぐに、市内の全教職員が緊急メールを発信することができるよう研修を行い、全小学校の校門には簡易バリケードが配置されたことも教えていただきました。この電話の日は7月28日だったのですが、午前中いっぱい県教委の聞き取り調査があったようです。大変な中、対応してくださいました。改めてご本人はいらっしやいませんが貴重な体験談をお聞かせいただき感謝申し上げます。

今回、全体会の場でも情報提供をさせていただきましたが、各校長先生におかれましては、日々様々な出来事にご対応なさっていることと存じます。また、残暑厳しい中で夏休みが明け、行事の多い9月10月に向け、多くの創意工夫を準備されていることと存じます。それらの情報を是非交換していただき、本日の研究大会が今後の職務遂行に大きく役立つことを願うとともに、学校を元気にする、教職員を元気にする元気な校長であるために本会が一致協力し和気藹々の中で小学校教育の充実・発展に寄与していくことを心より願っております。

最後になりましたが、本奥越大会に向け、多大なるご尽力いただきました、勝山市、大野市の校長先生方に深く感謝申し上げます、わたくしの開会のあいさつとさせていただきます。本日は、どうぞよろしく願いいたします。



# 祝 辞

福井県教育委員会

教育長 豊北 欽一



第75回という歴史ある小学校長学校教育研究大会がここ勝山市で開催されますこと、心からお祝い申し上げます。日頃、小学校の校長先生方には、本県の教育力向上にご尽力されておりますことに感謝申し上げます。

## 【夏の甲子園 107年ぶりに優勝した慶応高校にみる指導者像】

昨日、慶応高校が107年ぶりに夏の甲子園の優勝を飾った。1回戦であたった北陸高校のくじ運の悪さは残念だが、慶応高校の指導者に注目しました。

慶応の森林貴彦監督は、選手の自主性を尊重し、「理想はノーサイン」という考えのもと、「個」の力を引き出す、自ら状況判断できる選手を育成してきました。選手は森林監督を先生や監督でなく、「森林さん」と呼び、フラットな関係性であろうとし、練習中に必要のない大声は出さず、グラウンド整備は全員です。厳しい上下関係や長時間の練習はなく、髪型の丸刈りも求めない。「こうあるべきだ」という足かせを取り払い、自主性を重んじ、より高いレベルで野球を楽しむスタイル、そこには慶応伝統の「エンジョイベースボール」があったということです。

全国のスポーツの強豪校は、選手自らが考え、自主性を尊重するといいます。ぜひ、これからのスポーツ指導の参考にしたいものです。

## 【ブラジルの移民】

私は、知事の代理として、8月4日から10日まで、ブラジルのコロニア・ピニャール（通称：福井村）の入植60周年記念式典に出席してきました。日本人のブラジルへの集団移住は、1908年、笠戸丸という船でサンパウロ州コーヒー農場での雇用契約から始まったわけですが、本県では1962年12月に福井県出身の3家族、14名の方が入植し、「村づくり」の理想と信念のもと、我々の想像をはるかに超える様々な困難を乗り越えながら今日の安住の地を築かれました。

現在は55世帯、約220人の移住家族が暮らしており、また、1980年から40年以上にわたり、ブラジルからこれまでに約200名の技術研修員の受入れを行っており、県民との交流を深め、帰国後は両国の架け橋となっていていただいております。また、技術研修員が橋渡しになって、大安寺小学校や高椋小学校の児童の絵が福井村の日本人学校に掲示されていました。

ぜひ、その移民の歴史を聞いてみたい小学校があれば、ブラジル福井村で、2年間日本語学校の教師をしたこともある、県庁の産業労働部国際経済課の谷口あい子（現在、国際交流協会の旅券G勤務）さんに依頼して、児童に話をしてもらうことをお勧めします。

## 【プレゼン大会】

コロナが5類移行になって、ふるさと学習や他校との交流が盛んになってきました。子どもたちの主体性を活かし、その活動をふるさと教育フェスタやプレゼン大会で発表してほしいと思います。

先日、全国高校生プレゼン甲子園が、ハピリンホールで開催され、北は北海道から南は沖縄まで全国616チームからブロック予選を勝ち抜いた10チームが参加し、その様子がユーチューブで観られるようになってきました。高校生のプレゼンは年々レベルが上がって、考えや念いを伝える表現力、プレゼン力が向上していること、地域の人や第三者の意見を聞いて客観的根拠を明確にしていること、自分たちの考えを具体的な行動に移していること、質問に対する回答の準備力が備わってきていると感じています。

今年は、小学生の大会が、動画提出で予選をクリアした10チームによりハピリンホールで行われますが、審査員による質問に対する応答が勝ち負けに大きく影響すると思います。昨年小学生の大会終了後に、審査委員長の前田鎌利氏と話をされていて、質疑応答のレベルを上げる必要があると指摘を受けました。自らの発表に対して、どのような質問が投げかけられるのか想像すること、そして、その場で誰が回答しようかと児童が顔を見合わせるだけでなく、1人が率先して回答し、回答している間に、他の2人も考えていて「そのことに、

付け加えて回答させていただきます」という積極性が大事です。決勝大会に参加するチームは、高校生の動画を見て参考にしてほしいと思います。

### 【次代理系人材育成】

昨年5月に政府の教育未来創造会議が「理工系や農学系の分野をはじめとした女性の活躍推進」を提言したことにより、全国の大学で今、理工系分野の志願者を女性に限定した「女子枠」を設ける動きが広がってきています。高校の1,2年生の女子生徒に、グーグル合同会社やNPO 法人と連携して、この夏休みに、最先端のIT技術を学び、本物のオフィスの雰囲気を感じ取り、アプリ開発などのデジタルスキルを身に付ける「未来のテックリーダープロジェクト首都圏研修」を実施したところ、たくさんの応募をいただきました。

小学校においても、科学の楽しさを体感できるサイエンスショーや、算数の発想、ひらめき、見方・考え方を豊かにする謎解教室を開催するので、多くの児童の参加をお願いします。

### 【引き出す・楽しむ教育】

私が教育長になってから、「引き出す・楽しむ教育」を進めるため、全国の有名な教育有識者（木村泰子氏、工藤勇一氏、西郷孝彦氏）にご講演をいただいています。

今年度は、湘南学園長の住田昌治氏、国立教育政策研究所の白水始氏、京都大学大学院教育学研究科の石井英真氏をお招きし、授業参観等のイメージを共有しながら具体を通して対話する学校訪問と、授業づくりや学校づくりに関する講演会を実施します。多くの校長先生方にご参加いただきたいと思います。

また、県P連が今年12月2日の講演で、西郷孝彦氏をお呼びすると聞いていますので、ぜひPTA会長と一緒に校長先生も参加するとういと思っています。

### 【住田氏の著書「校長先生、幸せですか」】

住田昌治氏が、最近「校長先生、幸せですか」という著書を発行しました。皆さんは孤独になっていませんか。校長の仕事はハッピー・クリエイター。教職員、子ども、保護者、地域、学校に関わっている人すべてをハッピーに、こう思い続けていると、きっと素晴らしい学校になると言っています。そして、進化する校長として、3つのポイントをあげています。

- ①教職員をコントロールしようとがんばるのではなく、自走できるように導き、教職員が全力で走れるようにサポートすること。
- ②自分の力でなく、教職員の力で成果を出すのが校長の仕事。
- ③校長自身は力を抜いて、教職員が内に秘めている力を最大限に引き出すこと。

また、住田氏は、リーダーシップ、マネジメント、ファシリテーションを「校長の学校の経営 三種の神器」と呼んでいます。リーダーシップは「何をするか決めること」、マネジメントは「それをどのようにするか決めること」、簡単に言えば「うまくやること」です。そして、皆さんは、学校でファシリテーションを意識されているでしょうか。教職員の考えを引き出すファシリテーション力を校長が高めると、話し合いの場が柔らかくなり、意見を言いやすくなりますし、いずれは教職員全員がファシリテーターになれば、授業や職員会議も楽しくなります。この本には、住田氏が受けた質疑応答集も書かれており、参考になるとと思いますので、ぜひ読んでください。

また、今年6月に出版された杉並区和田中学校の校長だった藤原和博氏著書の「学校がウツくさい」は、新時代の教育改造ルールについて書かれていて、面白かったのでぜひ、これも読んでみてほしい。

### 【次期教育振興基本計画に盛り込むべきこと】

県の現行の教育振興基本計画は、令和2年度から6年度までの5年計画ですが、来年度に改訂作業を進めるに当たり、皆さんから、学校現場からみた現行施策の現状や課題、新たに盛り込むべき施策の提案をお聞きしたいと思います。現状追認の意見はいりません。改善すべき点、新たに取組むべき点を積極的に提案してほしいと思います。後日、様式をお送りしますので、回答をよろしくお願いします。

### 【終わりに】

各校長先生にお願いしたいことは、学調や体力テスト、いじめ、不登校、教員の超過勤務の状況など、自分の学校がどういった状況か分析しながら、改善に向け目標を設定して学校全体で取り組むことが重要であり、校長のリーダーシップ、マネジメント力、ファシリテーション力を発揮して、ハッピー・クリエイターであってほしいと思います。

本研究大会が実りある大会となるよう、併せて、皆様の益々のご健勝、ご活躍を心より祈念して、私の祝辞とします。

# 祝 辞



勝山市長 水上 実喜夫

第75回福井県小学校長教育研究奥越大会が盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げるとともに、勝山市を代表し、深く歓迎の意を表します。日頃は、福井県の小学校教育の充実・発展にご尽力いただき感謝している次第です。

さて、新型コロナウイルスが5類感染症に移行し、子どもたちの活動も以前のように戻ってきていることと思いますが、ウィズコロナとして、工夫をしながら教育活動を進めておられることに敬意を表します。

## 【勝山市の子育て・教育について】

本大会の趣旨にも示されているように、子どもたちを取り巻く社会が急激に変化してきています。大きな変化の代表的なものとして「生成AI」のようなものがすごい勢いで入ってきています。これまでは、「DX」「生成AI」という話があっても、ある程度距離をとりながら対応できていました。しかし、それが許されなくなってもきています。そして、すごい勢いで子どもたちのほうがそれに飛びついてしまうことで、バリケードをしても情報の渦というものはシャットアウトできない、そういう時代が来ていると感じています。そんな中での社会の動きに合わせて、先生方の果たす役割が大きくなっているのではないのでしょうか。

私も勝山市の話になりますが、今年度4月から現在まで約4か月、3分の1が過ぎようとしているのですが、その期間に生まれた新生児は30名しかいません。この先1年で100名を切るかは別として、こういった数字が常態化していることが現実です。

そういった中で勝山市は、これまで2年をかけて教育委員会について形を変えてきました。昨年度は、それまで教育委員会に属していた学校教育以外の部門「社会教育、社会体育、文化財行政」を市長部局へ移管し、教育委員会には、幼稚園、小学校、中学校という学校教育を残しました。そして、今年度はもう一段機構改革を進めて、今まで福祉事務所にあったこども課と市長部局で取り扱っていた保育園等を移管しました。私立も含めて、就学前の保育や幼児教育に教育委員会が関わり、小学校とより円滑な接続を図るなど、誕生から18歳あるいは22歳までを視野に入れた全ての子どもたちを、教育委員会が学校教育と同時にしっかりと対応していくこととしています。就学前教育と小学校教育の連携、あるいは放課後児童教育と学校教育との具体化を進めているところでもあります。どの世代でも、市としてどのようにサポートしていくか、切れ目のない子育て支援を推進しているところです。

また、どこの市町でも同じかと思いますが、社会の変化の中で多文化共生ということを強く意識しています。今年度からパートナーシップ宣誓制度を導入し、共生社会の実現に向けてお互いの人権を尊重し、多様性を認め合い、自分らしく生きることができる社会の実現に取り組んでいます。

もう一つは、国際交流ですが、今まで外国の方々とのやり取りというのは、海外へ出かけて行っているいろいろな見聞を広める、あるいは国外から招待して交流をするということが長く中心でありました。しかし今は、福

井県あるいは勝山市に海外の方がやってきて、一緒に生活をしていく中での国際交流を進めていきたいということで、CIR（国際交流員）の増強にも取り組んでいます。

### 【これからの福井県、勝山市】

7月14日に、福井県立恐竜博物館がリニューアルオープンしました。もうすでにおいでになられた方もいらっしゃるかと思いますが、今回は私の想像以上に大規模で素晴らしいリニューアルがなされていました。こういったものは福井県の新しい時代の象徴として、恐竜を資源としながら県内全体に輝きを広げ、これから先福井県でどうやって生活していくかという答えがあるのかと思っています。

また、北陸新幹線が間もなくやってきます。私共としては、この先中部縦貫自動車道が岐阜までつながることを心待ちにしていますが、ぜひ新しい福井県の中で、皆様方には学校教育等をしっかりお願いしたいと思っています。

### 【結び】

最後になりますが、この席についてから、50年前の自分が小学生だったころのことを思い出しておりました。校長先生をはじめ学校の先生は、本当に仰ぎ見るような存在でした。こうして少しずつ私のほうが年が上になってくると、いろいろ経験してきた同じ社会人として、皆さんは葛藤の中で教育をしてこられたと、今よく理解できます。もちろん、先生と子供たちの接し方はさまざまです。いろいろな形で接していただきたいと思っていますが、今も昔も学校の先生は、PTAの立場からも子どもの立場からも大きな存在であるということは変わっていないと思います。

結びに、今大会の8つの分科会に分かれいろいろな議論がされると思います。しっかりと情報交換をしていただきますようお願いします。また、本大会の準備にご尽力いただいた奥越の校長先生方にお礼を申し上げ、挨拶とさせていただきます。



# 令和5年度

## 第75回福井県小学校長教育研究奥越大会実施要項

- 1 大会主題 「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る  
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」  
－夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び  
未来を生き抜く力を育成する学校経営－
- 2 大会趣旨

今日の知識基盤社会においては、先端技術の高度化やグローバル化により急激な社会変化が進み、あらゆる分野で価値観も多様化してきている。また、新型コロナウイルス感染拡大による生活様式の変化やGIGAスクール構想の前倒しした取組など大きな改革が行われている。さらに、少子高齢化や人間関係の希薄化、家庭教育力の低下や人権・貧困問題等、子どもを取り巻く社会的要因も複雑に絡み合い、変化の激しい予測困難な現象や社会問題が山積している。

このような問題が出現する未来社会を、子どもたちが豊かに健やかに生き抜いていくためには、初めて出会う様々な問題にも主体的に挑戦し、他者と協働して知恵を出し合い、解決したり、新たな価値を創造したりする力を育成していかなければならない。また、様々な人とのつながりの中で学び合い、自らの人生や社会をよりよくしていこうとする思いや、持続可能で豊かな未来社会を創り出すことに貢献しようとする意欲を育てることも大切である。

そのためには、一人一人が志をもち、可能性に挑戦する態度と豊かな知性と感性に裏打ちされた人格形成を図りながら、「夢と希望」を育むことが大切である。そして、「夢と希望」をもつことが礎となって、子どもたちは学ぶことの意味や価値を見出し、難しいことにも立ち向かい、最後までやり遂げることで自己実現を目指すことができると思う。様々な情報を取捨選択しながら的確に判断し、粘り強く相互に理解し合い、ともに生きていくことができる道を探っていくことが極めて大切となる。

そこで、全国連合小学校長会研究主題を受け、副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定した。そして、全連小大会・東陸連小大会における13分科会を、福井県の学校数等より、下記のような福井型8分科会に編成して校長の役割を究明していく。

- |          |            |            |           |
|----------|------------|------------|-----------|
| (1) 学校経営 | (2) 知性・創造性 | (3) 人間性・健康 | (4) 人材育成  |
| (5) 危機管理 | (6) 社会形成能力 | (7) 自立と共生  | (8) 連携・協働 |

これまでの福井県における研究・実践の積み重ねを基にして、教育普遍的使命や新しい時代の要請に応え、未来をたくましく生き抜く子どもの育成を目指した学校教育の創造と推進に努めていかなければならない。

3 主 催 福井県小学校長会

4 後 援 福井県教育委員会  
勝山市 大野市 勝山市教育委員会 大野市教育委員会

5 日 時 令和5年8月24日(木)13時30分 開会

6 会 場 全体会 勝山市民会館  
勝山市元町1-5-16 TEL(0779)88-2222  
分科会 勝山市民会館  
勝山市教育会館  
勝山市元町1-5-6 TEL(0779)88-5555

7 日 程

時 刻	12:30～13:00	13:00～ 13:30	13:30～14:00	14:00～ 14:20	14:20～16:20
内 容	打合せ会 ┌ 運営委員 │ 司会者 │ 提案者 └ 記録者	受 付	開 会 式 (全体会)	移 動	分 科 会 (閉会式)
会 場	分科会会場	市民会館	市民会館	市民会館・教育会館	

8 開 会 式 (1) 国歌・新県民歌斉唱  
(2) 挨拶 福井県小学校長会長 田中 範継  
(3) 来賓祝辞 福井県教育委員会教育長 豊北 欽一 様  
勝 山 市 長 水上実喜夫 様  
(4) 来賓紹介

## 9 分科会

(1) 研究領域・研究課題・研究協議題・会場

分科会 研究領域	研究課題	研究の視点	会場
第1分科会 学校経営	創意と活力に満ちた学校経営	(1) 未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策定と推進 (2) 学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営 (3) 学校教育の充実を図るための評価・改善の推進	市民会館 第1会議室
第2分科会 知性・創造性	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進	(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けたカリキュラム・マネジメント (2) 知性・創造性を育む教育課程	市民会館 第2会議室
第3分科会 人間性・健康	豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程	(1) 豊かな心を育成する教育課程のマネジメント (2) 健やかな心身を育む教育課程のマネジメント	教育会館 ホール
第4分科会 人材育成	学校の教育力を高める研究・研修とミドルリーダーの育成	(1) 学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 (2) これからの学校を担うリーダーの育成	教育会館 第1研修室
第5分科会 危機管理	子どもを取り巻く様々な危機への対応	(1) 自らの命を守る安全教育の推進 (2) 危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり	教育会館 第2研修室
第6分科会 社会形成能力	社会形成能力を育む教育の推進	(1) 社会に発展に貢献する資質や能力を培う教育活動の推進 (2) 地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進	教育会館 第3研修室
第7分科会 自立と共生	自立と共生の実現に向けた教育活動の推進	(1) 子どもの自立や社会参加に向けた特別支援教育の推進 (2) 共に生きる社会の実現に向けた資質・能力を育む教育の推進	教育会館 第4研修室
第8分科会 連携・協働	家庭や地域との連携・協働と学校段階等の接続の推進	(1) 家庭・地域等と連携・協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進 (2) 学びの連続性を重視し、学校段階等間を円滑に接続する組織的な取組の推進	教育会館 第5研修室

(2) 司会者・提案者・記録者・運営委員

分科会	研究領域	司会者	提案者	記録者	運営委員
1	学 校 経 営	木部小学校 岡崎 克治	東十郷小学校 岡崎 良子	兵庫小学校 中谷 滋	北日野小学校 近藤 雅樹
2	知 性・創 造 性	志比小学校 西本 陽子	御陵小学校 田邊 尚紀	志比北小学校 田上 由美	吉川小学校 中村 利幸
3	人 間 性・健 康	梅の里小学校 新田 美樹	瓜生小学校 城谷 俊臣 熊川小学校 加藤 勝代	大島小学校 時岡 純子	芦原小学校 山岸 直樹
4	人 材 育 成	富田小学校 大石美弥子	有終東小学校 竹内 由美	三室小学校 玉木 由紀	本郷小学校 岸崎 浩明
5	危 機 管 理	大虫小学校 加畑 重樹	味真野小学校 松谷 昭子	白山小学校 八田 千香	磯部小学校 多田 敏明
6	社 会 形 成 能 力	萩野小学校 加藤 留美	糸生小学校 安井 秀明	四ヶ浦小学校 佐々木史世	上志比小学校 上田 嘉彦
7	自 立 と 共 生	敦賀南小学校 藤岡 真也	粟野南小学校 竹中 由紀	松原小学校 安居 裕之	今庄小学校 赤澤 達郎
8	連 携・協 働	西藤島小学校 石丸真由美	岡保小学校 松宮 龍栄	森田小学校 橋本 和也	豊小学校 宇野 泰裕



---

---

# 分科会主题别研究

---

---

## I 研究の視点

この3年間、校長に課せられた役割のひとつがコロナ禍における学校の対応、児童の学びの確実な保障であった。今春より、ようやく学校本来の活動が再開されるにあたり、気がつく対話型AI（チャットGPT等）が世の中を大きく席卷している。まさしく予測不可能な未来社会で子どもたちが主体的・協働的に生きるための資質・能力を育成することが、より一層学校教育に求められていると実感している。そこで、改めて、教職員が主体的・協働的な活動の意義を学ぶ機会として「つながる（連携・協働）」の視点から、スクールプラン【めざす学校像】の具体化を進めることとした。このことにより今年度の本校の合言葉「もっともっと楽しい学校づくり」実現の一助としたい。

## II 研究の概要

## (1) 教職員同士がつながる

【やりがいを持ち研究実践できる学校】

## ①めざす学校像の確認

- 「もっともっと楽しい学校アンケート」の実施
  - ・教職員対象「子どもたちにとっての『楽しい学校』とはどんな学校のことだと考えるか」

## ② 役割の中で力を発揮できる場の設定

- 全校集会 テーマ「もっともっと楽しい学校」
  - ・校長講話「東十郷小学校150年物語」
  - ・生徒指導・保健主事・図書主任・人権担当・理科担当・音楽担当・学年主任（特設）

## ○OJTを推奨

- ・ベテランと若手ペアによる学年、校務分掌（デジタル教科書推進校）

## ○気がかりな児童への組織的対応

- ・全職員による情報共有（毎日の終礼）
- ・専門機関との連携・しくみの明確化

## (2) 中学校区内の学校がつながる

【やりがいを持ち研究実践できる学校】

## ○中学校区内の課題共有

- ⇒小中連携テーマ「魅力ある学校に向けて」
  - ・ポジティブ教育の推進・定着（R3～）

- ・地元講師による夏季研修会 20分×4名

- ・一人1回以上、他校の公開授業参観への奨励

## (3) 保護者と学校がつながる

【安心して我が子を託せる学校】

## ○学校経営方針の発信

- ・スクールプランをシンプルにして共有
- ・学校だより・HPの充実
- ・業務改善への理解促進

## (4) 地域と学校がつながる

【地域の活性化に貢献できる学校】

## ○地域人材、資源の再発掘・活用

- ・隣接高校との交流再開（生活科を中心に）
  - ・家庭・地域・学校協議会の本格的活動再開
  - ・創立150周年記念実行委員会との協働
  - ・地元まちづくり協議会活動への参画
- ⇒自立した大人たちの総合的な学習の場

## III まとめ

## (1) 成果 ○同僚性の高まり

- 組織の活性化
- 学校運営参画意識の向上
- 地域ネットワークの広がり

## (2) 課題 ○時間確保のためのさらなる工夫

- 地域と教職員とのコーディネート
- 「魅力ある学校アンケート」

様々な「つながる」の先には【児童が笑顔で学べるもっともっと楽しい学校】があった。コロナ禍を経た今、様々な質の「楽しさ」を児童自らが得られる学校、提供できる学校であることが求められている。そのために校長として最優先すべきことは、教職員が働きやすい環境を整え、個々人の良さが発揮できる持続可能なしくみを構築することである。本校教職員のいきいきと働く姿がロールモデルとなり、子どもたちの希望へとつながることに期待している。

## ◎研究協議内容

竹中 いろいろなつながりの中での教育活動は非常に参考になった。子どもたちとのつながりの第一は授業だと思うが、授業は楽しいという実践があったら紹介してほしい。

発表者 授業がよくわかり喜びを感じられる学校にするため、簡単な問題にも多くの児童が答えることができ、達成感や喜びを感じられるような工夫、授業や児童に対する向き合い方を考慮した授業の構築をしている。デジタル教科書のモデル校として授業研究を進め、見合い学び合う研究がわかる学習につながっているようだ。

多田 保護者と学校がつながる中で、今までの運動会と150周年を記念した今年の運動会とで変わった点、工夫した点は何か。

発表者 実行委員会から子どもたちに赤白のTシャツをプレゼントしてもらい競技中に着ることで一体感が強まった。また、最終種目の全校踊りでは途絶えていた坂井音頭を踊り、地域の方や保護者の方も入って大きな輪を作り、思い出に残る一コマになった。事前には地域の方の指導のもと練習にも取り組んだ。

駒野 近隣の坂井高校との交流では、通常キャリア教育として高学年の交流を予想したが、2年生が交流した理由やねらいは。

発表者 かつては高学年でICT関係での交流があったが、一人一端末になってからは実施していない。2年生は、生活科のまち探検の一環として行った。道を隔てたところに大きな高校があり、たくさんの高校生が農業や工業などについて学んでいることを再認識していた。秋には「さか高マルシェ」に招待され、買い物体験をする予定である。

広瀬 本校では昨年度から職朝終礼ともやっていない。2学期からは児童理解のために週1でも行う予定だが、貴校で毎日やっている理由や効果はどのようなものがあるか。

発表者 まず、児童理解に関してはその日のことはその日のうちに共有する必要があると思う。また、話すことで生徒指導上不安なことがある先生の心を軽くしてあげたいと考える。一日一度は顔を合わせることで情報の共有や知りたいことを気軽に質問ができるメリットがある。

## ◎グループ協議内容

A・150周年記念事業については地域と連携、協力しているところが大きい。各種行事についても地域とのつながりが強いので非常に協力的である。  
・小中連携では、一人一研究を行いグルーピングして進めている。小規模校にとっては非常に有効な場である。

B・Job ロータを2年に一度程度実施し、新しい校務を進めていけるようにしている。前任者がいることで安心して取り組めるし、新しい発想で物事にあたることができる。

・児童のいい点や課題を教職員にたずねることにより、今後の指導の方向性が見えてくる。トップダウンよりもボトムアップを意識した学校経営を心がけている。

C・教員の不足や業務改善により、どんな点をスクラップしていったのか。職朝や終礼の見直しや、登校時間を遅らせたり週に2回程度早く下校したりした。宿題の量を減らしたり内容の見直しをしたりしている。AIドリルの導入や活用もしている。

・全国学調の結果を見て、校長会が中心となって今後の方針を立てている。スクールプランで共通認識のもと、児童の課題を解決していけるような学校をめざしたい。



D・中学校区の連携について、積極的に取り組んでいる地区、なかなか踏み出せない地区、さらに充実させたい地区など様々である。コロナも収まりつつある中で、校長が中心となって積極的に顔を合わせて話したり相談したりできる仕組み作りが必要である。

・地域とつながっていくことは、総合的な学習の時間や各種行事に地域の力を借りたり地域の特色を生かしていったりするためにも非常に重要である。ただし、しほりが強くて教員の工夫やオリジナリティが出せないこともある。また、事業を継続して残していく体制を作っておく必要がある。

(文責：坂井市立兵庫小学校 中谷 滋)

## I 研究の視点

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)では、実現すべき姿が「個別最適な学び」と「協働的な学び」と示され、「それぞれの学びを一体的に充実し『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる」とされた。さらに、GIGAスクール構想により、端末の活用を「当たり前」のこととし、児童生徒自身がICTを自由な発想で活用するための環境整備、授業デザインが求められている。そのためには、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図ることが必要とされる。まさに、知性・創造性を育むカリキュラムマネジメントが試される時代といえよう。

本校教員の学級担任の年齢は若い構成となっている。これを強みとして、若手が得意とするICT活用を研究の柱に据え、授業改善を進めることとした。一方で、これまでの実践とICTとを最適に組み合わせることで、教育の質の向上につなげていこうと考えたとき、以下の課題が浮かび上がった。

- (1) 校内研究を中心とした職員の組織的な取り組みの充実や授業の評価はどうあるべきか。
- (2) ICTを活用しながら協働的な学びを実現するための単元構成はどうあるべきか。

これらを解決すべくカリキュラムマネジメントを推進するにあたって、校長の役割やリーダーシップについて考えることとした。

## II 研究の概要

- (1) 組織的な取り組みの充実と授業の評価

- 中堅教諭をリーダーとしたOJTの推進
  - ・中堅をリーダーとした研究組織(2部会)の設立
    - 学年や校務分掌を考慮し、教務・教頭をアドバイザーとして配置
  - ・若手を講師とした現職教育の設定
    - 意見共有アプリ「ホワイトボード」の研修
- 意見共有アプリを活用した授業スタイルの確立
  - ・一人1研究授業の実践と授業評価(PDCA)の示唆
    - 様々な教科で「アプリ活用の意図と方法」を

指導案に明記させる。

- 研究アドバイザーとして、外部講師の参画
  - ・理論研修依頼
    - アプリ活用自体が目的化しないよう助言
  - ・指導案検討時からの参画依頼
    - アプリの効果・活用場面・形態の助言
- (2) 協働的な学びを実現するための単元構成の工夫
  - 既存する農業体験活動に探求活動を組み入れた「ふるさと教育」の位置付け(5年生)
    - ・プロジェクト学習型の学習展開を示唆
      - 児童が一人一役を担うプレゼンムービー制作
    - ・町主催「ふるさと教育発表会」の企画・立案
      - オンデマンドとオンライン会議を融合させた発表会の提案

## III まとめ

- (1) 成果
  - ・教科の枠にとらわれず、あらゆる教育活動において、児童がICTを活用し、自分の立場(考え)を意思表示する経験を積み上げられるよう留意した。その結果、発信・共有・話し合いという学習スタイルが児童の中にも浸透していった。この主体性が深い学び(知性)につながっていくと期待する。
  - ・探究活動や表現活動にICTを活用することで、分業⇔集約、修正を効率的に行うことができ、協働する楽しさや良さを児童に味わわせることができた。また、自分がこだわりたい分野に自由に時間をかけられるため、学習の個性化が図られるとともに、創造性を引き出すことにもつながった。
- (2) 課題
  - ・デジタル教科書をはじめ、日々進歩するICT技術に対して、組織的にどう対応していくか。
  - ・他校とのオンライン学習など交流を視野に入れた教材開発をどう進めていくか。

主体的・対話的・深い学びから子どもの知性・創造性が生み出されるようマネジメントしていきたい。



## ◎研究協議内容

鹿谷 ICT活用の良さについて、児童はどのように感じているのか。

発表者 児童自身から、全員の意見が共有できるアプリを授業で使いたいという希望が強い。意見を書いたり発表したりするのが苦手な児童も、先にアップされた意見を参考にして発信することができ、参加できたことに自信を持ち、自己有用感が高まっている。

矢部 教員の年齢構成にアンバランスさがあると言っていたが、どのような構成で研究を進めているのか。

発表者 担任は、若手が多くベテランがいないので、中堅をリーダーとし、教頭や教務もアドバイザーとして研究部会に所属し、キャリアに応じた役割分担のもと研究を進めている。

矢部 この年齢構成で、若手と中堅やベテランで2つの研究部会を作って、研究体制を進めているのは凄いと思うが、何か工夫があれば教えてほしい。

発表者 若手、中堅、ベテランのそれぞれの教員の得意分野を生かした活躍の場を意識して、教員間の繋がりをもたせるように構成している。

室田 学校全体では、ICTが得意で取り組んでいる教員と苦手な教員とではどちらが多いか。また、ICT活用を積極的に進めていく上での課題やここは使わない方がいいと思われる場面があったら教えてもらいたい。

発表者 若手教員が多く、苦手な教員を気軽にサポートする体制ができており、教員全体として抵抗感はほとんどない。授業において、ICTとこれまでのやり方をどうデザインするか、流れや必要性を大切に、それぞれの活用場面で、授業者や児童自らが判断していけばいいと思う。



## ◎グループ協議内容

A・ICTの活用について、とにかく使ってみるというスタートだったが、今はデジタルとアナログをいかにうまく使い分けるかという能力を、子どもに育てていくことが大切になってきている。

・学校間や学校内でもICT活用に格差があるが、校長が率先して前向きな姿勢を示して、学校全体で取り組む雰囲気作りをしていく必要がある。

・ICTで活用する学習アプリや機材が、地域や学校間で違いがあることによって、子どもの進学時や教員の異動時に戸惑いが生じないように、地域や学校間で情報を共有するなど、数年後の見通しを持って取り組んでいかなければならない。

B・校長は、学校の組織的な取組としてICT活用を進め、それが児童の協働的な学びとなっているか評価する必要がある。

・ICTを活用することによってより良く達成することが大切で、ICT活用ありきになることには注意すべきである。

C・これまでのICTありきの実践から、R5年度は、ICTの効果的活用の検討に入っている。

・教職員、児童、地域に対して、きめ細やかな配慮に基づいた校長のリーダーシップ、ファシリテートが必要とされている。

・コロナ禍の慣習や地域行事への参加などは、業務改善と逆行することが多く、若い教員の感覚や常識に対してきめ細やかな助言が必要である。校長は教員を守る姿勢で、信頼関係構築のマネジメントを行うことが大切である。

D・ICTのための授業づくりではなく、発達段階に応じた、協働的な学び、個別最適な学びへと向かうための活用を考えていくことが大切である。

・校長の「何を大切にするか」というぶれない舵取りが必要である。また、教職員の話に耳を傾け、トップダウンにならないようにする。

・若手の活躍の場をつくり、やりがいや可能性を発掘する。

・ICTのスキルだけでなく、授業の中で、やはり子どもをしっかりと見取り、授業をつくっていくことが大切である。

(文責：おおい町立大島小学校 時岡純子)

## I 研究の視点

各学校区の地域素材を対象とした「ふるさと学習」は、平成29年告示の学習指導要領が示す資質・能力の3本柱のうち、とりわけ「学びに向かう力、人間性等」を育むために最適の学習である。

本研究では、「ふるさと学習」の充実のための、カリキュラムマネジメントについて述べる。

## II 研究の概要

### (1) 嶺南地域全体の取組

嶺南教育事務所では、嶺南の特色を生かした探究的な学習を推進するため、「嶺南ふるさと学習推進プロジェクト」を行っている。

令和3年度にスタートしたこのプロジェクトでは、継続的に域内の小中高の実践交流がなされ、2年目の令和4年度には、嶺南4町から計6校の研究実践校が、特色ある「ふるさと学習」に取り組んだ。

### (2) 瓜生小学校の実践

瓜生小学校では、令和4年度に総合的な学習の時間（以下「総合学習」）の全体計画と年間指導計画の大幅な見直しを行った。総合学習が「ふるさと学習」の主たる実践の場であることを踏まえ、「地域と連携した学びを通して、探究的な学びの資質・能力を育成し、ふるさと「瓜生」に誇りと愛着を持つ児童を育てるための学習」が実現できるカリキュラム作りを行った。

合わせて、総合学習を通して育成する資質・能力を、スクールプランに位置付けた学校の教育目標や目指す児童像とリンクさせ、探究的な学びの資質・能力を育成するだけでなく、社会の中で自分らしく生きるための資質・能力を育てることを目指した。

### (3) 熊川小学校の実践

熊川小学校では、これまで曖昧になっていた、総合学習を中心に取り組んでいる「ふるさと学習」における評価の見える化について研究した。

「ふるさと学習」はスクールプランの実践の場でもあるので、校長として取り組んだスクールプランを活用した自己評価を、「ふるさと学習」のPR活動でも実施した。これまでは、活動後の児童の感想が主たる評価方法であったが、スクールプランの自己評価と協力者による他己評価も加え、振り返りを行った。評価の見直しにより、各活動のねらいや次の活動への課題が明確になり、スクールプランや総合学習の全体指導計画と具体的実践の目標のズレが最小化された。

### (4) 小・中・県立学校の連携

三方上中郡校長会では、「ふるさと学習」のカリキュラムの充実を目指し、校種間連携という視点で現状報告と意見交換を行った。

現状では、若狭町内小学校9校のうち異校種間で連携して学習を実施しているのは、近隣の高校を訪問して家庭科実習を行っている等の数校のみである。今後、小中でお互いの取組の成果を交流し合えるとよい、小（中）学校から連携の希望があったら積極的に対応していこうなどという意見が出された。

## III まとめ

カリキュラムマネジメントは言うまでもなく校長の仕事である。スクールプランに示した教育課程を編成できるか、校長自身の確かな資質・能力が求められる。

## ◎研究協議内容

今村 第3分科会のテーマである「人間性」について、本実践によって、児童の成長したところを教えてほしい。

発表者 指示待ちの児童が多かったが、自分からPRする力がついた。積極的に他者と関わる姿が見られた。商業施設では、伸び伸びと元気に発表し、積極的に買い物客と関わっていた。

また、書かせる活動を重視したことで、児童自身が目標を意識し、自分で考えて活動に取り組む態度が育った。

山岸 小規模校では、校長が自ら動いてしまいがちになる。職員を育てるという観点からの工夫を教えてほしい。

発表者 瓜生小は、実践者が若手で初めての6年担任だったこともあり、校長が寄り添って育てていくというかたちをとった。前任の校長は、地域の人材ともつながりが多く、サポートしやすかった。

熊川小は、実践者が本校に長く在籍したベテランで、高学年担任の経験も豊富だった。校長は、よく授業を見に行き、自分だったらこうしたいという思いを伝えた。児童の様子についても伝えると、評価につながると担任もありがたく思ってくれたようだ。

坪田 発表を聞いていると、複式学級であることや小規模校であることがよい効果を与えているように感じる。その点について、聞かせてほしい。

発表者 学校全体が家族のようなつながりがあり、本実践のPR活動でも、それがよく活かされた。低学年は、大きな声の挨拶で人を集め、中学年が説明し、高学年がやりとりをするなど、役割分担が自然にできていた。下学年の児童が上学年の児童の姿や成果物を見て学び、育っている。また、職員が一人一人の児童を丁寧に見ることができ、地域の方々が協力的であるという良さもある。



## ◎グループ協議内容

A・スタッフは少ないがやる事が多く、ふるさと学習にかかりきりになることができない。市の主任会で横のつながりができたのはよかった。

・一人一人が抱える校務が多くて、抱え切れていない職員もいる。今まで一人でやっていたことを複数で行うことにし、OJTができています。

・若手が学校にいと、いろいろな面で助かる。校長のリーダー性がやはり大切だろう。

B・奉納米など地域をPRする活動や、ジオラマ作り、幻の里芋作りを修学旅行でPRした体験を通して、児童は人前で話すことに抵抗がなくなった。校長は、職員が自走できるように支援するとよい。

・コーディネート、組織化するのが校長の仕事ではないか。小さい学校だからと校長が動いてしまうと、うまくいくことばかりではないという心配もある。

・担任だけでは対応が難しいとき、校長が出ようかと考える。学校の状態で判断するしかない。

・リーダーシップがあることは信頼になるが、教頭や教務主任を育てることも必要である。

C・職員がすぐに教頭に頼ってしまうという状況を踏まえて、組織的な対応や職員なりの解決案を持って相談するように指示した。

・コロナ禍の中で、トップダウンでやらなければいけない状況が助長されたと感じている。小集団で一度話をするようにしている。

・課題ごとにミドルリーダーを中心に協議できるような体制を作っている。そうすることで、ミドルリーダーと職員を育てたい。

D・橋本左内について学ぶふるさと学習を進めている。今でも卒業生が話題に出すほど、心に残るようだ。

・葦でストロー作りを行った。地域から認められ、児童の自己肯定感が高まった。

・社会科とのつながりで文化財を調べる活動を行っている。児童は、他市と交流することで、自分の市の良さに気づいたようだ。

・小小連携を3年生からスタートしている。梅作りや文化財めぐり、山登り等を一緒に行っている。

(文責：おおい町立大島小学校 時岡純子)

## I 研究の視点

大野市では令和2年度から2年間、国立教育政策研究所の指定を受け「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組んだ。令和3年度にこのモデル校区の小学校に校長として着任し、不登校未然防止を目指した魅力ある学校づくりを通して集団指導の充実に継続して取り組んでいる。

共同研究・研修を進めるポイントに、次の4点を示した。

- ①研究のねらいや方向性を明確にし、共通理解する。
- ②研究の必要性を実感する。
- ③PDCAサイクルを確立し、定期的実践について交流、見直し、問い直しをする。
- ④取組の核となるミドルリーダーを育成する。

教職員一人一人の資質・能力の向上、およびミドルリーダーを中心とした共同研究・研修の充実において校長の果たすべき役割と指導性について考察した。

## II 研究の概要

### (1) 1年目の取組と課題

魅力ある学校づくりのねらいやターゲットは、経験豊かな教職員はすぐに理解した（あるいは既に実践していた）が、経験の浅い教職員への浸透が課題であった。

担当者は研究主任とし、研究主題と絡めた。その際、「重点課題にせまる具体的な取組」と「絆づくりの活動」との関連付けが課題となった。

市教育委員会主催担当者会議に校長として参加。大阪成蹊短期大学教授の講義をZoomで視聴し、「重点課題にせまる具体的な取組」は、「居場所づくり・絆づくりの活動」でよいことに気付いた。そこで次年度は、研究主題と絡めることはせず、生徒指導（不登校対策）の取組として生徒指導主事を担当者にした。具体的な取組は、児童に任せる場面を設定しや

すい特別活動（行事、学活など）を含めた幅広い「居場所づくり・絆づくりの活動」を掲げた。

### (2) 2年目の取組と課題・成果

魅力ある学校づくり担当を研究主任から生徒指導主事に変更したことで、研究主題への取組との区別が明確になり、年3回の魅力ある学校づくりの会で、意識調査をもとに取組を問い直すPDCAサイクルが確立できた。居場所づくりと絆づくりを時期に応じバランス良く設定することや、目の前の学級・学年集団の状況を正しく見取り、居場所づくりから、次第に絆づくりの活動を増やしていく流れはできた。

本校では、個別の支援を必要とする児童の割合が高く、特別支援教育体制を整えることが、学校運営上大きな割合を占めており、年度初めは、どうしても居場所づくりに重点が置かれる。集団としてのまとまりが出来始める2学期後半から3学期が、絆づくりのタイミングとなる。この時期に歩みを止めず「あと一歩前進」を合言葉に、絆づくりを意識した主体的な活動や、児童主体の授業に取り組んだ。

### (3) 3年目の取組

ミドルリーダーが、研究のねらいや方向性を明確に示すことで、校内全体で共通理解して取り組んでいる。

教職員が取組の必要性を実感し見直しをもつことで、自らPDCAサイクルを確立し、定期的実践の交流、見直し、問い直しを進めている。

## III まとめ

取組の持続性には、校長とミドルリーダーとの間で必要性を共有し、教職員の「知・情・意」にいかに関与させることができるかが重要である。日々の営みである教育活動全体を通して、協働する学級・学年集団を育成していく。そして、高め合う集団の一員であることの自覚が、児童の自尊感情を高めると考える。

## ◎研究協議内容

正玄 校長先生としてのご経験の中で、ご苦労があったのは、どのような点だったか。

発表者 魅力ある学校づくりについてのねらいや方法を自分の中で理解していくことを、3年間かけて取り組んだ。やっと理解することができた。3年間を時系列でまとめたことで具体的な取り組みについて「居場所づくり」「絆づくり」を生徒指導の集団作りにつなげることができた。教育活動の不易の部分について、子どもたちを大切にすることが後回しにされがちであると感じている。子どもたちを大切にすることこそが大切だ、ということ。「知・情・意」(知性・感情・意志)にどれだけ働きかけることができたかが重要だと感じている。

正玄 それぞれ思いのある先生方をどう一つにしていくか、校長の熱量が求められると感じた。

古跡 ミドルリーダーの育成について、この取組を進めていく際、校内の組織をどのようにつくられたのかをお聞きしたい。

中村 (関連して) 校内の人事、魅力ある学校づくり担当を生徒指導主事に変えた理由は何か。

濱野 (関連して) 子どもの学び活動と、教職員の学び活動は相似形であると言われる。教職員集団の育ちはミドルリーダーの育ちである。教職員集団の育ちについて、校長がどのように見取っていったのかを詳しく知りたい。

発表者 組織については、生活部、学習部を利用した。その中で意識調査を分析し、見直しを行った。ミドルリーダーの育成については、校長室で校長が思いを伝え、そのことに対する担当者の思いを聞き合うという、1対1でのやり取りを続けている。

「魅力ある学校づくり」担当者については、1年目には研究主任が担当した。授業づくりからのアプローチでは、いろいろな要素が絡んできてもうまくいかなかった。朝の会や特別活動を含んで、取組を問い直す研修を実施し、校内研究と差別化した。

発表者 「子どもの学び活動と教職員の学び活動は相似形」という言葉が心に残った。教職員の育ちについては、低学年部、中学年部、高学年部、特別支援部、それぞれの担当が、若手を中心にクロスセッション方式で交流している。校長自身も見取り、できている子をほめている。若手の教員が、できている子に注目してほめているところを見ると、教員の育ちを感じる。ここでなら成長できると思える学校づくりにこれからも努めていきたい。

## ◎グループ協議内容

A・B(合同)・若手の育成に関して、火をつける、モチベーションをあげるのが難しいと感じている。校長の思いをどう語るか、どう伝えるかについても苦慮している。いろいろな方法や工夫を取り入れ、時間を区切って行っている。全校放送で、児童に語りながら教員に話す、という方法をとることもある。

・小学校では中学校に比べて組織をつくりにくいと感じる。若い教員を研究主任にして育てるなど、立場で人を育てている。校務分掌でどう頑張らせるかも重要。立場を育てていく、立場を引き上げていくようなシステムを構築することも重要である。

C・視点(1) 学校の教育力向上に関して。4月に研究テーマに関する校長の思いを伝えて共有し、夏休みには、ミドルリーダーが中心となり、研究の具体的な方策について協議する場を設けた。2学期にも再度実践する予定である。改めて、人材育成の大切さを実感することができた。児童生徒の不登校対策としてポジティブ教育を推進したり、若手育成の研修会を実施したりしている。

・毎年、新採用教職員が配置され、ミドルリーダーが少なく、若手が多くなっている。そのためか、ミドルリーダーに自信がなく、主体的に動く場が少ないと感じる時がある。校長が率先して動くこととミドルリーダーが育たないことも心配される。若手に役をつけて意欲づけしている。教頭、教務がリードすることもある。例えばDXプロジェクトチームをつくり、若手に役割をもたせて意欲づけにつなげている。また、従来の視聴覚担当とは別に、タブレット活用やアンケートフォームの作成などに取り組む教員を募ったり、立場を変えたり、座席を変えたりすることで意欲が高まることもある。さまざまな方法を用いている。

D・人材育成について、指導力のある教員と新採用の教員を組み、指導できる体制をつくっている。例えば低・中・高学年それぞれに核となる人を配置した。また、校内支援員の配置も工夫したり、教科担任制を実施したりしている。直近の課題としては、産休代の先生が配置されず、ゆとりがない状態。教職員がリタイアしないように常に気を張っている。



(文責：勝山市立三室小学校 玉木 由紀)



## I 研究の視点

越前市は17の地区で構成され、各地区に小学校が設置されている。しかし、地区によって周辺環境は大きく異なっている。また、その環境についても、道路の拡張や宅地造成、空き家の増加などにより、日々、変化している。子どもたちは、そのような中で生活しているため、彼らを取り巻く危機も多岐に及び、その対策は常に更新が必要である。

災害や事故等は学校にいるときにだけ発生するわけではない。子どもたち一人一人が自分で自分の命を守る防災教育・安全教育には、家庭や地域との連携が欠かせない。教育課程における安全教育を、地域人材や施設の行事等と結びつけて実施することで、より実践可能なものになることは言うまでもない。

学校においては、子どもたちが巻き込まれてしまうかもしれない危機について、全教職員が共通理解した上で、組織的・計画的な予防対策と指導が求められる。教職員一人一人が学校内外で起きている事案を「自分事」と捉え、子どもたちの命と安全を守る適切な対応ができるよう、校長としてどのように関わることが何より重要である。

このような視点に立ち、校長として果たすべき役割と指導性を、現任校と前任校の実践をもとに明らかにする。

## II 研究の概要

### (1) 危機管理体制の更新

#### ① 各種マニュアルの更新

- ・危機管理マニュアル
- ・消防計画、防火管理者届
- ・生徒指導マニュアル
- ・人権教育年間計画

#### ② 学校周辺環境の把握

- ・商業施設等の新設による変化への対応
- ・空き家の増加による危険個所の把握
- ・獣害対策設備設置による危機対策
- ・定期的な交通指導の徹底
- ・「見守り隊」からの情報収集

### (2) 家庭や地域と連携した防災教育

#### ① 引き渡し訓練の実施

- ・原子力災害を想定した訓練
- ・「モニタリングポスト」の周知

#### ② 地区公民館防災教室の活用

- ・地区消防団の放水実演
- ・合宿通学事業「防災教室」

### (3) 教職員の危機意識の向上

#### ① 学校安全に関する意識

- ・市内全小5担任の救命救急講習
- ・防災教室講習会の伝達

#### ② 生徒指導に関する意識

- ・事案発生時の情報共有
- ・対応の役割分担

#### ③ 服務規律に関する意識

- ・懲戒処分の指針等の確認
- ・教職員の事故、違反等の事例検証
- ・職員会議での自己チェック表の活用

## III まとめ

### (1) 成果

コロナ禍を乗り越えた今、教育課程全体を見直す中で、学校の安全についても再考することで、より実効性のある体制をつくることができた。

また、多忙化する学校現場では、危機管理については、校長が中心となって、常にアンテナを高くして、社会や地域の情報収集にあたることで、いち早く子どもたちの安全を確保する対策を講じることができた。

### (2) 課題

教職員の意識は、研修や管理職からの情報提供を繰り返さなければ、なかなか「自分事」にならない。

子どもを取り巻く危機も、これからまだまだ多様化しそうだが、校長には、常に情報を更新しながら働きかけを続ける根気強さが不可欠である。

## ◎研究協議内容

塚本 発表をうかがって、改めて自校の危機管理を振り返るよい機会をいただいた。発表の中で、自然災害対策として大雨警報が発令された際に、越前市の校長会で判断し、メールを発出すると話されていたが、判断の方法やその基準に関して詳しく教えていただきたい。

発表者 昨年度より越前市校長会長が判断し、前日予告メール、当日朝、自宅待機、臨時休業などの指示メールを発出している。線状降水帯の動きにより、特定の場所のみ大雨になったり、天候の変化も激しかったりするため、判断基準の見直しの必要性も感じている。

塚本 越前市は6月の大雨の際に、前日に臨時休業を決定していたが、あのように早い決定となった理由は何か。

発表者 6月の大雨の際は、校長会が判断したのではなく、市教委が前日に決定し、各校に次の日の臨時休校の連絡が来た。

市橋 教員が勤務できない状況であれば、臨時休業となるが、6月と7月の大雨で対応が違ったのはなぜか。

発表者 6月の判断と7月の判断では、判断元が違う。6月は、市教委が指示した「臨時休校」となり、教員も勤務していない。7月は校長会で決定し、「臨時休業」となり、教員は勤務していた。

木村 1学期の臨時休業の際には、保護者から「越前市はもう休みにしているよ。」「鯖江市は遅いのでは。」などと言われたことがあったが。逆に越前市は、早く決定することで保護者から何か言われることはなかったか。

発表者 今のところは何も聞いていない。当日対応が必要な保護者もいると予想して、前日予告メールを出している。

木村 予告メールは、どの市町も発出していると思うが、急に子どもの対応を考えなければならなくなった保護者は、学校に対して何か言うてくることはないのか。

発表者 少しでも早く保護者に対応を考えていただくために、前日に予告メールを出している。今のところそれで不都合はない。



## ◎グループ協議内容

A・現在各校危機管理という点で、最も配慮しているのは熱中症対策である。登下校の熱中症対策グッズの使用、下校時の塩分タブレット、定時給水の方法、外での活動の制限などを実施している学校がほとんどであったが、校内研修を行い熱中症の危険性を改めて確認したという学校もあった。

・特別な場合の危機管理だけではなく、日々の教職員の行動、校内の巡回などを丁寧に行うようにしている。また、夜遅くまでの一人での勤務を行わないよう声かけをし、教職員の普段の細かな危機管理意識を高めるような働きかけを行っている。管理職と他の教職員との意識の差をいかになくしていくかが大切である。

B・小中の校種間で危機意識が異なる。危機管理能力の育成に関して課題が残る。危機管理意識を高めることが重要であるが、危機回避能力に関しても育成する必要がある。教職員自身に考えさせ、組織的に対応していきたい。

C・危機管理の分野も広いので、自然災害に絞って話をする、豪雨や台風などの際の地区ごとの判断が非常に難しい。いかに早く判断を出すのか、ということが課題となる。前日に判断することが大切である。外国籍児童への連絡などは、翻訳に時間がかかり、連絡が遅れないように注意している。不審者対応に関しては、学校自体が、人が入ってくることを止められるづくりではないため、校内放送を効果的に使用して、校内の情報共有に努めなければならない。

D・災害の際には、児童に確実に指示を出すことが重要である。全児童の保護者への安全な引き渡しが、最大の目標となる。通信などができない状況も想定しておかなければならない。また、教職員の価値観を変えることは非常に難しい。非告知の避難訓練も効果がある。「5秒で命を落とす。」ことを児童に浸透させ、自分で命を守らなければならないことを伝えている。教職員には、マニュアル通りではなく、様々な場面を想像させて避難訓練に臨むように話している。

(文責：越前市白山小学校 八田 千香)

## I 研究の視点

社会形成能力を育むための具体的な方策として「社会の発展に貢献する資質や能力を培う教育活動の推進」「地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進」が挙げられる。本研究では、児童が、自己の役割を認識し、他者と協力しながら、よりよい社会の実現に貢献しようとする主体的な態度を身につけるための教育活動と、未来社会の実現に貢献する力を育むキャリア教育を推進する上での校長の果たすべき役割と指導性について考えていく。

## II 研究の概要

## (1) ふるさと教育の活動例

本校は、越前町の北西部にあり、緑に囲まれた農山村の中に位置している。この地は泰澄大師が山岳信仰をひろめ、数多くの文化財が残っている地域である。ふるさと教育の充実を図り、郷土への誇りと愛情を育む心、地域や社会に貢献する志の育成をめざし、校長として取り組んできた教育活動を紹介する。

私は、昨年4月に本校に赴任したが、コロナ禍の影響もあり、ふるさと教育はほとんど実践されていなかった。しかし、児童と話していると、「糸生地区のことをもっと知りたい」「地域の方とっと触れ合いたい」「糸生地区をもっと元気にしたい」という声が多く上がってきた。そこで、ふるさと教育を通して、子どもたちが参画できる部分を探っていった。

## ①地域の自然と人材を活用した活動

地域の自然の恵みを材料に、民生委員や福祉推進委員の方々など地域の方を指導者として招いて「朴葉飯づくり」「桑の実ジャムづくり」「ブルーベリーと夏野菜ピザ作り」等の体験活動を行った。

## ②越知山登山

昨年6月に5・6年生で越知山登山に挑戦した。多くの地域の方々に支えられ、登り3時間、下り2時間半という厳しい行程の登山を経験

したことで、児童は大きく成長し、今まで以上に試練を乗り越えられるようになった。また、泰澄大師について詳しく知り、山頂からの絶景を堪能したことで越知山の大きさ知ることができた。今年度は雨のため中止。

## (2) 夢への授業（キャリア教育の活動例）

## ①卒業生を活用した活動

児童と年齢の近い20歳代の本校卒業生から話を聞き、将来の夢と希望を意識させ、困難な状況になっても頑張れる児童を育てたいと考えている。児童の希望と実態に合わせて計画している。

・警察官 ・消防士 ・看護師 ・ダンス講師  
・教員 ・海外留学経験者 ・海外博物館研究員

## ②現代の名工

刀剣日本一を2度受賞した刀匠（森國清廣氏）から刀剣作業体験と話を聞いた。将来の夢について考えるきっかけにして欲しいと考えている。

## (3) 学校だよりの発行

！学校だよりの発行を通して、ふるさと教育への取り組みや思いやりのある活動の紹介を行っている。昨年度は、82号発行した。

## III まとめ

## (1) 成果

- ・児童は、自然や地域の方々と触れ合う機会を通して地域の良さを知り、地域の一員としての自覚を高めることができた。
- ・体験活動が家庭・地域での話題になり、高学年では、更に活動を計画したいという声が上がった。

## (2) 課題

- ・継続した取り組みになるよう地域との絆を太くしていかなければならない。

コロナ禍は、地域とのつながりを細くしたが、今回の実践を通して、児童が地域の方々とふれあう機会が増え、地域の良さを知るよい機会となった。今後も、校長として学校・地域全体でより高みを目指した教育が行われるよう努めていきたい。

## ◎研究協議内容

松原 ①地域との活動が、どのような社会形成能力と結びつくと考えているのか。

②校長として、どこまでどのように関わっているのか。どのように担任の力を伸ばしているのか。

発表者 ①児童自身が、体験したことをどのような発信していくかを考えることが、児童の社会形成能力育成につながると考える。糸生小の児童は、中学生になると多数の朝日小学校出身生徒の中で少数派となり心細い思いをする。その中でふるさと教育での経験や地元の良さを強みにし、自信を持って進んでいって欲しい。発信する体験を積むことで、自信を培って欲しい。

②業務改善が叫ばれる中、担任の負担は増やしたくない。計画・準備を校長と地域人材で行い、各活動を紹介し担任に希望を聞いている。担任と地域の人をつなぐこと、担任が地域を知ること、担任もふるさと学習を楽しむことが、担任の力になると考える。

松原 校長の思いが担任に伝わっていると感じる。

内田 ①それまでふるさと教育の実践がなかったのは、コロナ禍の為か、それとも前から無かったのか。

②どの学年がどんな活動をしているのか。ふるさと教育とどのようにリンクしているか。

発表者 ①ふるさと教育は、コロナ禍以前は0ではないが少なかった。コロナ禍で祖父母の会の活動が0になり、祖父母が学校に来る機会が無くなった。

②朴葉飯づくりは1・3・4年生、桑の実ジャムづくりは1・6年生、笹団子づくりは1年生、ブルーベリーと夏野菜ピザづくりは1・2・3・4・5年生が行った。1・2年生は生活科、3年以上はふるさと学習として総合の時間に位置づけている。越知山登山は5・6年生が、キャリア学習は6年生が総合の学習で行っている。

牧井 学校が統廃合されるなか、新しい学校に糸生地区のよさを引き継いでいくことに関してどのように考えているのか。

発表者 自身は校区地区の区長もしており、区長会でも学校再編について話題になる。糸生小での活動は、学校再編後もバスで糸生分館に来れば、分館で同じ活動を行うことができる。学校が再編される前の今の段階から、小小交流の中の活動に組み入れておく。また、将来的には、校長を終えた後も地区のよさを残す事に協力していきたい。

## ◎グループ協議内容

A・社会形成能力を育むために、校長のリーダー性・指導性をどのように発揮していくか。

①校長がその地区を知ること。その為に知っている人から教えてもらい、土台作りをする。

②地区や合併区の強みを引き継ぎ、先生方の活動に結びつけていく。

③先生方のアイデアを生かし、安心して教育活動をできるようにする。

④若手を育成するためにも、思い切り任せる。若手がのびのびと力を発揮できる雰囲気を作る。

⑤地区との結びつきが重要。地域で頑張っている人と触れ合う機会を増やす。相談できる人脈を作る。

⑥地域のPRを様々な形で行う。それを子どもが知ることによって子どもの意識が高まる。地域の人も学校の活動が分かり協力を得ることができるようになる。

以上が、校長の役割と考える。

B・地元の企業と連携しキャリア教育を進めている。美浜地区は小・中とキャリア教育面では上手く機能している。ふるさとや地域に愛着をもつ教育が必要と感じる。

C・学校再編を見据えた交流を行っている。交流の中でもしっかり話し合いに参加できるように、普段から校内で取り組んでいる。再編後も萩野の名が残るよう、昨年度は児童が萩野ラーメンを企画した。  
・人事交流で来ている埼玉県教諭の学校とオンライン交流をしている。アウトプットの大切さを実感している。

D・コロナ禍の中でも、納涼祭など地域が積極的に行っていた。業務改善との兼ね合いが難しい。

・地域からの要望をむげに切ると、地域との関係が難しくなる。学校の考えを伝えながら、縮小へ。

・キャリア教育に、卒業生を活用している。

・福井市はキャリア教育プログラムがあり、キャリア教育コーディネーターに関わって貰える。市が用意してくれるものについて、校長が担任に紹介している。



(文責：越前町立四ヶ浦小学校 佐々木 史世)



## I 研究の視点

「特別な支援を要する子どもたちにとって過ごしやすい学校であるならば、すべての子どもたちにとっても同様である」と私は考えている。近年、特別な支援を必要とする児童は増加傾向にあり、学校は、これまで以上にインクルーシブ教育の考え方を生かすとともに、特別な支援が必要な子どもたち一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導及び支援を、必要なタイミングで提供できるようにしていくことが重要である。校長が、子どもたちの学びやすい環境を整備し、効果的な支援の充実を図るとともに、すべての教職員が特別支援教育に対する理解を深め、専門性を高めていくことが重要である。

このような視点に立ち、子どもの自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援する特別支援教育を推進したいと考える。そのうえでの校長の果たすべき役割と指導性について、まずは特別支援学級の実態に目を向け、考えていきたい。

## II 研究の概要

## (1) 学びやすい環境の整備

## ①優先的な教室配置

通常学級の学年のまとまりを優先し、特別支援学級は各階に1クラスずつ配置していたものを、同じ階で隣接する位置への配置に変更した。

## ②ユニバーサルデザインの視点

R2年度より校内研究のベースに「ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり」を据えた。

## 【ユニバーサルデザインの視点】

「焦点化」(シンプルに)ねらいや活動をしほり達成感を味わえる

「視覚化」(ビジュアルに)視覚的な理解を大事にして確かな理解のもとで活動できる

「共有化」(シェア)人の思いや考えを知り、つながることができる

## (2) 教育的ニーズに対応した効果的な支援の充実

## ①独自の校外学習

交流学級での校外学習だけではなく、特別支援学級のみでの校外学習を実施。

## ②マラソン大会に向けての試走

・校内マラソン大会を市の陸上競技場で実施。

→見通しを持たせモチベーションを上げるため、特別支援学級のみ現地試走を実施。

## ③マラソン完走お祝いパーティーの計画・実施

・材料の買い物に行く(お金の使い方)

→修学旅行につなげる(お小遣いの使い方)

## ④他校の特別支援学級との交流

・リモートで何回か交流を重ねたあと、実際に相手校まで出かけた。

→バスの乗り方(時間・整理券・料金)

## ⑤野菜の栽培(生活単元学習)

・収穫物を他校との交流に活用

・地域の方とのふれあい

## (3) 全教職員の特別支援教育への理解の向上

## ①講師の配置(R4)

特別支援学級2クラスの担任2人に加え、教科担任として講師を1人専属で配置し、担任の負担減と、きめ細やかな指導を実現できた。

## ②多くの教員の出入り授業(R5)

通常学級の担任を教科担任として時間割に積極的に組み込むことを試みたが、現実的には難しい。

## III まとめ

【成果】・特別支援学級担任が、それぞれの取り組みにおいて「子どもたちにつけたい力」を明確に持って取り組むことができた。  
・児童一人一人のニーズに合わせたきめ細やかな対応ができた。

【課題】・全教職員の特別支援教育(学級)に対する理解の浸透。  
・特別支援学級担任と交流学級担任の情報共有の時間の確保



## ◎研究協議内容

一瀬 本校は、各学年単学級で教室数に余裕がないため、特別支援学級の配置は決まっている状態。他の学級と並べた配置にしたいが、離れた場所にしか配置できない状況。

平田 特別支援学級は、児童数が少ないので、校外に出での活動等に取り組みやすいという面がある。例えば、公共機関の利用経験のない児童にその経験をさせてあげたいと考えている。特別支援学級での取組を通常学級の手本として広げていくのもよいと思う。

発表者 過去には学級内で調理をしてみんなで会食するという経験をよく行っていた。近年は、コロナ禍やアレルギー対応などで実施できない状況である。可能な体験活動を吟味して、大切にしていきたい。

古川 発表では、「講師」を特別支援学級の副担任としたとのことであったが、その配置はどのようになっているのか。本校では、「特別支援講師」が配置されているが、通常学級での支援活動を行っている。

発表者 「特別支援免許」を所有していることもあり、市教委と相談の上、副担任として配置した。教員には、配置が必要な状況を説明した。

蓑輪 特別支援学級の児童は、いわゆる「親学級」での活動も行っていると思うが、「親学級」の児童が特別支援学級に行き、そこで児童と一緒に活動することなどあれば教えてほしい。

発表者 本校児童も教科によっては、「親学級」に入って活動しているが、「親学級」の児童が特別支援学級で活動するという形は行っていない。特別支援学級に担任以外の教員が入る授業は行っている。

蓑輪 中学年になると性的な面に関する興味を持つ児童も出てくる。本校では、特別支援学級児童を対象とした性教育を進めている団体から講師を招き、全教員で研修を受けた。特別支援学級の児童だけでなく、全ての児童にとって必要なことだと思う。性教育の指導のあり方もユニバーサルデザインで進めていきたいと考えている。

藤岡 本校では、WISKの結果の見方やマルチリポートメントについての研修を行った。特別支援学級の児童に必要な支援は、全ての児童にも必要なことであるということを教員で確認した。

## ◎グループ協議内容

A・タブレットの使い方で困り感を持つ児童が見受けられるが、その児童が使えるようになる支援ができれば、通常学級の児童でも同様の支援を行うことで困り感を持つ児童がなくなると考える。

・教員の「あの子がいるから大変」という意識の改革が必要である。また、特別支援学級を特別視して通常学級と分けるという意識も変えていかなければならない。全ての児童を対象とするユニバーサルデザインの意識づくりを進めていくことが大切。

B・どの学校でもユニバーサルデザインの環境づくりや授業づくりを実践してきている。中学校と比べると小学校の指導が充実していると感じる。

・特別支援学級の児童の満足感を得るために、保護者の満足感も大切。その要素を今後の協議内容の柱のひとつにしてはどうか。

・原級復帰を求める児童や、通級への取り出し希望者が多くなり対応が難しくなっていると感じている。教員側が支援のあり方を考えていくことも大切であるが、児童の側からの教育的ニーズは、自分たちで考えて要望していく力を育てることも大切だと思う。

C・特別支援学級児童への対応は、通常学級に在籍している個別の支援が必要な児童にも有効である。ユニバーサルデザインの環境整備や授業づくりを学校全体で進めていきたいと思う。

・校長のリーダーシップや熱意、教職員や教育委員会への向かい方が大きく特別支援教育の方向性を決定づけていくと感じる。

D・特別支援学級の教室は、隣に配置してあることで合同作業等都合がよい。また、大きな教室を2つに分けるという方法もある。

・特別支援学級に交流学級の担任が支援に行くことは、小規模校では困難である。発達障害の児童も増えており、突発的なことへの対応等のしわ寄せが教務にいくこともある。人事面での支援を希望している。



(文責：敦賀市松原小学校 安居 裕之)

## 研究課題

家庭や地域等と連携・協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進

## 研究発表題

家庭・地域と「つながる」を大切にしたい学校づくり ～ひと・もの・ことをつなぐことを通して～

福井市岡保小学校長 松宮 龍栄

## I 研究の視点

福井市では、令和4年度から令和8年度の学校教育方針を「学びをつなぐ・未来につなげる～『つながる』を大切にしたい学校づくり～」とし「郷土福井に誇りを持ち、たくましく生きる子どもの育成」を目指している。その取組の中の一つとして、創造性豊かな魅力ある学校や、保護者や地域に信頼される学校がつけられ、郷土に誇りを持ち未来の福井市を担う子どもたちが健やかに育つことを目的として、「地域に生きる学校づくり推進事業」が実施されている。各学校では、地域に開かれた学校づくりを推進するために、以下の4つの観点から各学校の実態に応じて具体的な取組を立案し、特色ある教育活動を展開している。

- (1) 体験活動の充実
- (2) 地域の人材・資源の活用の推進
- (3) 園・小・中の交流
- (4) 家庭や地域との連携

校長は、このような教育活動を推進していくにあたり、育てたい子ども像、目指すべきビジョンを保護者や地域と共有し、目標の実現にむけて学校・地域連携のカリキュラム開発を提唱・促進し、教職員が協力してそれを実施する体制づくりと風土醸成を行っていくことが大切だと考えている。

## II 研究の概要

岡保地区は、地域の教育資源「ひと・もの・こと」が非常に豊かな校区であり、これらの教育資源を生かした地域関連の学習活動を通して、子どもたちに地域への愛着と誇りを育てている。これまでの本校歴代の校長が取り組まれてきた家庭・地域と連携した教育活動と、新しく取組を始めた教育活動等を紹介する。

## 1 岡保地区の「ひと」に関わる取組

- (1) 岡保あったかノート
  - ・岡保地区ひとづくり部会との連携
- (2) 岡保あったか見守り隊
  - ・岡保地区育成市民会議との連携
- (3) 家庭・地域・学校協議会

- ・地域コーディネーターとの連携

## 2 岡保地区の「もの・こと」に関わる取組

- (1) 「岡の泉」湧水群の調査・景観保全活動
  - ・岡の泉環境整備委員会との連携
- (2) わらんべ田・あいじょう畑活動
  - ・PTA、外部団体との連携
- (3) 岡保地区区民体育祭と校内体育大会の合同開催
  - ・岡保地区自治会連合会、岡保地区体育振興会との連携
- (4) 地域の教育資源の掘り起こし
  - ・福井県農業試験場、福井県消防学校

## III まとめ

## 1 成果

- (1) 家庭・地域との連携を図るための教育資源である岡保地区の財産（ひと・もの・こと）の素晴らしさを確認することができた。
- (2) 子どもたちは、ふるさと岡保について「自然が豊か」「地域の人と仲がいい」「交流がたくさんあっていいところ」「心が安まる」というような印象を持っている。このような岡保のよさを生かしながら、ふるさと岡保を愛し伝統を守っていかうとする子どもの育成に努めることができた。
- (3) 学校評価の質問項目で、児童「自分は、地域に関わる学習や行事を通して、地域とのつながりを大切にしたいと思う」の平均が4段階の評価で3.5、保護者「学校は、地域と連携している」の平均が3.5と高い評価を得ることができた。

## 2 課題

- (1) 岡保地区の財産である「ひと・もの・こと」のよさを取り入れた学習活動をさらに充実させていくことが必要である。
- (2) 学校と家庭・地域が、子どもたちの様子や課題、付けさせたい資質・能力を共有し、さらに連携・協働を進めていくための学校・地域連携のカリキュラムを検討していく必要がある。

## ◎研究協議内容

石橋 岡保小学校の実践から地域とのつながりを深めていることがよく伝わってきた。福井市内では、小学校同士での他校との交流活動の実践はあるのか。

田中 同じく他校との交流活動に関連して、児童数の減少により学校の統合が進んでいる地域もあるが、統合を見据えた他校との交流はあるのか。

発表者 福井市は中学校区で取組を進めている。定期的に校長間で情報交換をしている。中学校区の中で、小小連携にも取り組んでいる。岡保小は、他の2小とつながりをもっており、例えば、図工の作品を見てもらい、感想を書いてもらったり、総合的な学習の時間の発表を見てもらったりといった交流活動に取り組んでいる。

また園小連携として岡保こども園との交流も行っている。岡保小を含む近隣小学校では、統合の予定はないので、それを見据えた取組はしていない。

平田 P T Aとのつながりを深める取組はあるのか。

発表者 本校のP T Aは、学校主体というスタンスであるので、児童とのつながりを重視した特別な活動はない。しかし、保護者は協力的な地域である。

明石 家庭・地域・学校協議会の人数と地域コーディネーターの役割はどのようなものか？

発表者 協議会委員の人数は校外から公民館長など7名。地域コーディネーターは、公民館館長、自治会連合会長などふるさと学習を進める際に関わっていただいている。

加藤 鯖江東小では、公民館の会議に参加しているが、地域と関わる際の校長の役割はどのようなものか。

発表者 校長は、公民館の運営審議会委員になっている。また、地域の方が見守り隊として、児童と一緒に登校してくれた際、校長は校門で児童を出迎えているので、その場で情報交換をしたりしている。

寺前 学校評価のキャリア教育に関する点での低い数値を受けて、地域との活動を取り入れたことが参考になったが、その他にも取組の具体例はあるのか。

発表者 岡保地区には、三大まつりがあり、児童が関わる部分も多い。地域の人々は、コロナ禍前の状態に戻したい意向がある。取組の中には、休日に登校させる必要があるものもある。校長として、できることとできないことを地域に伝え、理解を得られるよう提案、協議をしている。

## ◎グループ協議内容

A・地域の方々やゲストティーチャーの高齢化が進んでいる。今後、持続的に協力を依頼できるのかが大きな課題である。地域によっては、後継者が育っているところもあるが、そうではない地域も見られるなど地域の力の弱体化が否めない。諸団体を統合、集約するなどの工夫で、強化と負担の軽減を図る地域もある。

・HPや学校だよりなどで学校の情報を地域に積極的に発信し、学校の教育活動に興味をもってもらうことで、学校への協力者を募ることも必要である。

B・国からの補助金で活動を進めている団体が地域にあり、当該団体から学校に活動依頼があるため、協力して取り組んでいる。また、地域は伝統工芸（越前和紙）の盛んな町であるが、P T A等で紙漉きに関連した方がおらず、高齢化と後継者不足、持続可能な取組等で不安を抱える。和紙組合としては、後継者を育てるという目的のためにも、学校には協力的である。

C・校長として、地域とのつながりについて何ができるかを常に考えており、教頭と共に地域とのつなぎ手としての役割を担っている。また、学校や地域、スポ少も含めて、業務改善に取り組む必要性を感じている。

・中学校区の連携会議を月1回実施している地域もあれば、コロナ禍以降、小中連携会議を実施していないところもある。

D・平成31年に4校を統合再編した学校であるが、旧学校時代にそれぞれの地域から求められていたことを、統合後の学校として取り組むには無理がある。それぞれの公民館や園と今後どのように関わっていくかが課題となる。逆に4年後に2校に分割される学校では、公民館は一つのままなので、それぞれの学校でこれまでの取組ができるように準備をしておく必要を感じる。

・また、先般のコロナ禍で見直した取組については、元に戻すことは考えていない。



(文責：福井市森田小学校 橋本 和也)

# 福井県小学校長教育研究大会主題・副主題一覧表

年度	大会主題（副主題）	開催地
55	世界から信頼される誠意と信念に満ちた日本人の育成 (新教育課程をめざす豊かな人間性の追求)	東海・北陸 福井大会
56	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (創意ある教育経営の実践)	大野市
57	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (意欲あふれる小学校教育の創造)	武生市
58	人間性豊かな児童の育成をめざす教育の創造 (教育経営理念に立つ自校の教育構想と展開)	小浜市
59	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	鯖江市
60	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	坂井郡
61	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	敦賀市
62	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく生き抜く子どもの育成)	東海・北陸 福井大会
63	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (厳しく自己確立をめざす子どもの育成)	勝山市
平成	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (信頼と愛情につながる育成を求めて)	大野市
2	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子の育成)	武生市
3	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (世界をみつめ、広い心をもつ実践力のある児童の育成)	小浜市
4	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学ぶ意欲とたくましい実践力のある児童の育成)	鯖江市
5	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子どもの育成)	坂井郡
6	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (豊かな心を培い、たくましく生きる子どもの育成)	福井市
7	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 (自己確立できる人間を育てる学校像の創造と具現)	敦賀市
8	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 (自ら考え、主体的に判断し、心豊かで、たくましく行動できる児童)	勝山市
9	第49回全国連合小学校長会研究協議会 第32回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会	福井市
10	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 (自ら生きる力を切り拓き、21世紀にはばたく子どもの育成)	武生市
11	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 (個性を尊重し合い、豊かな自己実現を目指す児童の育成)	小浜市
12	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 (豊かな心と自己実現を目指す確かな力をもつ子どもの育成)	鯖江市
13	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 (豊かな感性と確かな知性をはぐくむ学校経営を目指して)	坂井郡

年度	大会 主 題 ( 副 主 題 )	開 催 地
14	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな力を持ち、共存社会を生きる児童の育成)	大 野 市
15	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心とかかわる力を持ち、共に生きる児童の育成)	三 方 郡
16	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と自ら学び続ける力を持ち、たくましく生きる子供の育成)	東 海・北 陸 福 井 大 会
17	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心とたくましく生き抜く力を持ち、共に歩む子供の育成)	武 生 市
18	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を持ち、たくましく生き抜いて自己実現を図る子どもの育成)	高 浜 市
19	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を持ち、健やかでたくましく生き抜く子どもの育成)	鯖 江 市
20	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (確かな学力を持ち、心豊かにたくましく生きる子どもの育成)	坂 井 地 区
21	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を持ち、自立と共生を目指す子どもの育成)	勝 山 市
22	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を持ち、未来を拓く子どもの育成)	敦 賀 市
23	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢をもってたくましく生きる児童の育成)	東 海・北 陸 福 井 大 会
24	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて挑戦する子どもの育成)	越 前 市
25	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	若 狭 町
26	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	越 前 町
27	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	坂 井 市
28	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	大 野 市
29	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	敦 賀 市
30	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	越 前 市
令元	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成)	小 浜 市
2	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営)	東 海・北 陸 福 井 大 会 ( 紙 上 発 表 )
3	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営)	鯖 江 市 (オンライン)
4	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営)	坂 井 市



---

# あ と が き

---

昨年度に引き続き参集型により開催されました第75回福井県小学校長教育研究奥越大会。福井県教育委員会教育長 豊北欽一様、勝山市長 水上実喜夫様をはじめ、多数のご来賓をお迎えして、勝山市民会館と勝山市教育会館を会場として開催いたしました。

皆様のご理解とご協力により、全日程を予定通りに進めることができました。ご参加いただきました皆様には改めて感謝申し上げます。開催に当たっては様々なご意見をいただきましたが、県内の校長先生方が一堂に会し、直接顔をつき合わせ情報を交換することができたことは貴重な機会になったと考えております。

本大会は、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題として、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性について8分科会で研究や実践が紹介されました。また、研究協議では提案者の事例を基に意見を交換する中で、自らの考えを広げ、深め、改めて校長としての使命を再認識することができたのではないのでしょうか。

皆様におかれましては、奥越大会の成果を取録した本研究紀要をご一読いただき、今後の本県小学校教育推進の一助にいただければ幸いに存じます。本大会において、貴重な提案発表をしていただいた各ブロックの校長先生方、そして、記録・編集等の任に当たられました関係各位のご苦勞に対しまして深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会のために、細部にわたりご指導・ご支援をいただきました福井県教育委員会、勝山市、大野市、並びに緻密な準備・円滑な運営に誠心誠意ご尽力いただきました奥越地区の校長先生方と県小学校長会教育研究委員会の校長先生方に心より感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。ありがとうございました。

福井県小学校長教育研究委員長  
勝山市立北郷小学校長

奥 村 純 子

---

**福井県小学校長教育研究奥越大会  
研究紀要 (No. 49)**

令和5年10月発行

---

編集 奥越地区小学校長会  
発行者 福井県小学校長会  
発行所 福井県小学校長会事務局  
印刷所 朝日印刷株式会社

---

